

平成 30 年 6 月 29 日現在

機関番号：11302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04396

研究課題名(和文)「伝統的な言語文化」学習における文化の継承と創造に関する総合的研究

研究課題名(英文) Synthetic research about the succession of the culture in "traditional language culture" learning and the creation

研究代表者

児玉 忠 (Tadashi, Kodama)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50332490

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：本科研は、「伝統的な言語文化」の創作面に絞り、効果的な教員研修プログラム、および郷土教材や授業モデルを提案することを目的とした。

これを受けて、最終年度(平成29年3月)に『平成27～29年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)報告書 言語文化と言語生活に根ざした創作指導』(研究代表 児玉忠)を刊行した。この報告書は、「伝統的な言語文化」の創作面のなかでも、「短詩型文学」の創作を中心にまとめられている。

報告書に収めたそれらの実践研究とその記録は、効果的な教員研修プログラム、および郷土教材や授業モデルの提案などにつなげていく予定になっている。

研究成果の概要(英文)：A regular course lab was limited to the creative side of "the traditional language culture", and it aimed at proposing an effective teacher training program and its hometown subject and a class model. This was received, and 'the creative guidance which a root for Heisei 27-29 years grant-in-aid for scientific research base research (C) report language culture and the language life' (research representative Kodama Tadashi) was published in the final year (March, the 29th year of Heisei). This report is being put around the creation of "short poetry pattern literature" together even in the creative side of "the traditional language culture". That practical research which it obtained in the report, and that record will be connected to the proposal of an effective teacher training program and the hometown subject and the class model and so on.

研究分野：国語科教育

キーワード：伝統的な言語文化 創作 短詩型

## 1 . 研究開始当初の背景

「伝統的な言語文化」として継承されてきた短詩形文学(俳句・短歌)の創作方法は、専門的な技能者・知識人によって担われてきた印象があるが、一方で伝統性の理解や基本的な技能・能力は広く一般大衆により継承されてきた面も大きい。平成 20 年告示学習指導要領では、これを義務教育の内容として明確化し、学習者を「伝統的な言語文化」の継承者として明確に位置づけた。「伝統的な言語文化」に対する認識の形成と基本的な能力の習得が求められることになった。

ところが、学習指導要領の告示後の 6 年間に総括すると、さまざまな問題が顕在化してきたことが見受けられた。大きく捉えれば、「伝統的な言語文化」に対して、創作面を重視しない実践では、学習意欲・学力形成の満足感を欠くこと、指導者の創作力・創作理論が不十分なこと、生涯学習的な展望をもっていないことである。また、そのための科学的基礎の確定が不十分であり、研究と実践とが連携できていないことも問題である。なお、詩の分野における方言詩と呼ばれる領域は、地域性と伝統性を備えたものであり、「伝統的な言語文化」に含めて扱うことにする。

## 2 . 研究の目的

本研究計画は、「伝統的な言語文化」の創作面に絞り、科学的基礎を確定した上で、生涯学習的な展望の確保、創作方法の検討・整備、地域性・郷土性を反映した学習、学力観の確立を図り、効果的な教員研修プログラム、地域・郷土教材、授業モデルを提案することを研究目的とする

## 3 . 研究の方法

本研究計画は、三カ年間の研究期間であり、次の手順・方法にしたがって進めていく。

( 1 ) 科学的基礎の確定 = 教員対象のアンケート、俳句・短歌・詩創作者・愛好者対象のアンケート、学習者対象のアンケートによる「伝統的な言語文化」継承の魅力と困難点の把握を行う。( 一年次 )

( 2 ) 生涯学習的な見通し = 俳句結社・短歌結社・詩創作グループへのインタビューによる「生涯学習」としての価値・意義、及び困難点の把握を行う。( 一・二年次 )

( 3 ) 教員の創作力育成・創作理論構築 = 教員研修等を通して、効果的な方法を開発する。( 一・二年次 )

( 4 ) 地域的・郷土的な学習の視点 = 特色のある地域的・郷土的な伝統的な言語文化とそ

の実践・教育を掘り起こし、分析し、典型的なモデルを抽出する。( 一・二年次 )

( 5 ) 学力観の確定 = ( 1 ) ~ ( 4 ) を総合して、実践理論的な学力観を整備し、提案する。( 三年次 )

## 4 . 研究成果

本科研は、「伝統的な言語文化」の創作面に絞り、効果的な教員研修プログラム、および郷土教材や授業モデルを提案することを目的とした。

これを受けて、最終年度(平成 29 年 3 月)に『平成 27~29 年度 科学研究費補助金 基盤研究(C) 報告書 言語文化と言語生活に根ざした創作指導』(研究代表 児玉忠)を刊行した。この報告書は、「伝統的な言語文化」の創作面のなかでも、「短詩型文学」の創作を中心にまとめられている。なかでも「俳句」に着目した実践事例が多い。

たとえば、河野智文は「小学生を対象とした俳句指導の実践」において、語句の句風による表現や発想の拡張、季節感の回復、俳句が成立する場の体験という 3 つのねらいのもと、小学 6 年生に対する俳句の創作指導を行った。

河野はこの実験授業について、(1)言葉の感覚、(2)季節の感覚、(3)「場」の感覚と俳句への関心の 3 点からその成果と課題を振り返り、「小学生を対象としたこともあり、句のできばえというよりも、その場で句を作るというねらい(俳句が成立する(立ち上がる)「場」の体験)が即時的には最も効果的に実現できたように思う」と述べている。

鈴木愛理は「手段としての俳句創作の検討」において、中学生や大学生を対象に、枕草子を読み深める手段として俳句創作を位置付ける指導、ものの見方・感じ方・考え方を養う手段として俳句創作を位置付ける指導を行った。

鈴木はこの授業について、「手段としての俳句創作は、俳句の創作自体が指導目標でないことがかえって創作を楽しんでいる向きがある」とし、「書けた! 読んでもらえた! という記憶として残っていくことが、後々、文学の言葉の価値について気付いていくことにつながっていくだろう」と振り返っている。

小川雅子は「言語生活の地域性に根ざした俳句と書写の指導」において、学習者の言語生活の地域性に根ざした言語文化としての俳句を創ることを主な観点として、小学 5 年生を対象に授業を行った。できあがった作品に対して、短冊形に切った半紙に小筆で書く活動を加えることによって、書写指導との有機的な連携を図った。

小川はこの授業について、「児童の季節の

実感には、季語のくくりよりも繊細な一面がある。言語文化としての俳句の心を、季節の変化や美しさを感じる感受性ととらえるなら、地域によって異なる季節感とそこの言語化を主体とした俳句の創作活動は、時代とともに新しい俳句を発展させていく可能性がある。個々の児童の内にある季節を感じ取る心を意識させ、言語化して交流する学習に、言語文化としての俳句の伝統性と創造性が実現すると考える」と振り返っている。

佐藤明宏は「小学生が作る歴史俳句」において、地域の歴史的素材を織り込んだ俳句を「歴史俳句」と名付け、地域性・郷土性を主眼とした俳句創作指導を大学生による指導補助のもと小学3年生と6年生を対象に行った。できあがった作品は「はがき新聞」と名付けられた形式に書きまとめられ交流された。

この授業について、佐藤は「この『歴史俳句のはがき新聞づくり』の学習は、情報化時代の今に必要な確かな国語力を育てることができる学習である」とし、「また、さらにこの学習はこれからの子どもたちの国際化への対応の手段の一つになる」としている。そして、外国人にこのはがきを通して自己紹介することで、「俳句の中の日本人ならではの『風土記的・歳時記的もの見方』をアピールできたなら、それはこの地域の中で季節の中で育ってきた者としておおきな誇りと自信につながるのではないかと考える」と振り返っている。

「俳句」以外では、千々岩弘一が「『伝統的な言語文化』を実感させる国語科単元の開発に関する試案」において、「薩摩狂句」を取り上げて中学生や大学生を対象に創作指導を行った。

この授業について、千々岩は「生徒たちの生活の中で機能している地域語に着目させることで、地域に生きる人間としてのアイデンティティの形成や文化の継承・創造が促進されるはずである。同時に、生活している地域(郷土)への愛着も醸成されるに違いない」とし振り返りつつ、「このとき地域語への誘いは、決して押しつけであってはならないし、生徒たちの日常生活と切り結ぶ可能性をもったものでなければならない」とその留意点を述べている。

また、児玉忠は「大学生による方言詩の創作と地域間交流」において、さまざまな地域の学生たちが同じ空間で学ぶ大学の教室がもつ特性を活かし、大学生たちが異なる地域の方言それぞれの良さや魅力を相互に感じることを目的とした活動を行った。

この授業をふりかえって、児玉は「『異化』という視点を『方言詩』の創作と交流(受容)に取り入れることで、地域の伝統的な言語文化としての方言に対して質的に高い相互理解(再認識・再発見)がなされることが確認された」と振り返っている。

報告書に収めたそれらの実践研究とその記録は、効果的な教員研修プログラム、および郷土教材や授業モデルの提案などにつなげていく予定になっている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 0件)

〔学会発表〕(計 0件)

〔図書〕(計 1件)

児玉忠『詩の教材研究 - 創作のレトリックを活かす - 』(教育出版 2017年4月)  
総頁 328p

〔その他〕

ホームページ等

報告書

『平成 27~29 年度 科学研究費補助金 基盤研究(C)報告書 言語文化と言語生活に根ざした創作指導』(研究代表 児玉忠 平成 30年3月)

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

児玉忠 (Kodama Tadashi)

宮城教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50332490

(2)研究分担者

小川雅子 (Ogawa Masako)

山形大学・地域教育文化学部・教授

研究者番号：40194451

植山俊宏 (Ueyama Toshihiro)

京都教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50193850

河野智文 (Kawano Tomohumi)

福岡教育大学・教育学部・教授

研究者番号：70304144

位藤紀美子 (Itou Kimiko)

京都教育大学・教育学部・名誉教授

研究者番号：80027713

千々岩弘一 (Chijiwa Kouichi)

鹿児島国際大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：90163724

佐藤明宏 (Satou Akihiro)

香川大学・教育学部・教授

研究者番号：90242750

鈴木愛理 (Suzuki Eri)  
弘前大学・教育学部・講師  
研究者番号：90722215